

「福島の高校生が語る “福島いま”」

12月6日（土）にNPO法人アースウォーカーズ主催の「福島の高校生が語る福島いま」の講演に参加しました。そこでは、福島原発問題や高校生たちが参加したドイツへの派遣についてなど、彼ら自身が体験した貴重なお話を聞くことができました。その概要を報告します。

はじめに、アースウォーカーズ代表の小玉直也さんから東日本大震災が起きた当時の福島状況についてお話がありました。小玉さんは、多くの方々が放射能の影響を受け福島からの避難を強いられた過去や、新潟で原発が再開するかも知れないことへの不安を話されました。そして、このような活動の原動力は、あの日の事故の記憶を風化させてはいけないという強い決意だそうで、その行動力や使命感には圧倒されました。特に印象深かったのは、未だ放射能汚染の危険があるため避難指示区域の境界線が引かれており、「その境界線が福島の人々の繋がりを引き裂いている」という言葉です。原発事故は人々の暮らしを激変させ、人間同士の隔たりを作ってしまう恐ろしいものであったことを再認識することができました。

そして、高校生の高橋優衣さん、小野泰輝さんから夏休みに行われたドイツへの派遣で、感じた日本との違いや再生可能エネルギーや行政の取り組みについて学んだことを報告して頂きました。ドイツの街は、環境に配慮した造りになっているそうで、駅や連邦議会事堂などの建物を吹き抜けにし、太陽光を効率的に取り入れることで、電気使用量を減らす取り組みが行われています。また、100%水素燃料で動く電車や、至る所に太陽光パネルを設置するなど、再生可能エネルギーが主流な国であることがよく分かります。インフラだけではなく、居住空間もエコに作られています。壁の薄い日本の建築方法とは異なり、壁を分厚くすることで冷気を遮断し、節電に取り組んでいるそうで、環境負担軽減への意識の違いを感じました。最先端の技術を取り込む一方で、戦争の記憶が刻み込まれた歴史的建造物は当時のまま、保存されているそうです。これにより、場所全体が「未来へ向かう歩み」と「忘れてはならない記憶」を同時に語りかける象徴的な空間となっているのです。

さらに、高校生たちは教育の面でも日本とドイツの大きな差を感じたと語っています。彼らが実際に現地の学校を訪問した際、授業で政治についてのディスカッションが盛んに行われているのを目の当たりにし、衝撃を受けたそうです。日本では、若い世代の低い投票率が問題視されていますが、積極的な意見交換の場が少なく発言することを躊躇する人が多いように思います。しかし、ドイツの生徒主体の授業と、自国の在り方を深く思考することを重視する教育方針は、若者の投票率の向上や自己主張力の強化に寄与し、社会問題への主体的な関与を促していると感じられました。一般的に、日本の学校では教科書に沿った学びが行われますが、テストには出てこない、より社会的なことに目を向けることの重要性についても高校生たちは話してくれました。＜写真1＞

票率が問題視されていますが、積極的な意見交換の場が少なく発言することを躊躇する人が多いように思います。しかし、ドイツの生徒主体の授業と、自国の在り方を深く思考することを重視する教育方針は、若者の投票率の向上や自己主張力の強化に寄与し、社会問題への主体的な関与を促していると感じられました。一般的に、日本の学校では教科書に沿った学びが行われますが、テストには出てこない、より社会的なことに目を向けることの重要性についても高校生たちは話してくれました。＜写真1＞



＜写真1＞ドイツでの経験を語る高橋優衣さん

最後には、質疑応答の時間が設けられ多くの方が質問を投げかけたにも関わらず、皆さんの確に答えてくれました。「アースウォーカーズさんの考える未来の福島の像とは」という質問には、「現地の人々の声に沿った政策立案の仕組みを整備する」「人と自然が共存できる暮らしが理想である」と回答されていました。本来、政策の取り決めは住民の理解を得て、可決されるべきものであるにも関わらず、現在の日本はそれが全うされていないということを再確認しました。また、私は「この活動を続けていく中での目標は何なのか」と質問しました。高校生たちは、「世界に福島の現状や過去について深く知ってもらうために、興味をそそるような内容で伝えていきたい」「海外と日本の相違点を発信することで人々に日本を客観視してもらい、行動に移してもらえたら嬉しい」と語っていました。私は、高校生でも熱意があれば世界に日本のことを発信することは可能であることを学び、「自分がしなくても誰かが発言してくれるだろう」という他人任せな思考が今の日本を作ってしまったのかもしれないと気付かされました。

そして、原発への考えを尋ねられた際、近い将来福島だけでなく日本から原発を無くすことができると小玉さんは仰っています。これを実現するには、もう一度過去と向き合い、それぞれが主張すべきであるのではないのでしょうか。

(CSO インタビュアー 村上 友唯)